広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

博多曲物×樹脂。オール福岡で完成させた「波形平皿」

境 悠作　福岡県／プロダクトデザイナー

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。

「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。福岡県選出の匠、プロダクトデザイナー・境悠作さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

アイデアを磨いたエリア・コンサルティング

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

博多曲物で波形の平皿をつくる

水、光、音など自然の中に普遍に存在する波を、美しく使いやすいプロダクトで日々の暮らしに取り入れられたら―。今回のプロジェクトに向けてそう構想する境さんの頭に思い浮かんだのが、物産展で目にした博多曲物（まげもの）だった。

博多曲物は、スギやヒノキなどの薄い板に熱を加えて湾曲させ、それを桜の木の皮でとじた容器で、福岡の伝統工芸品の一つ。本来の様式とは異なるが「とじずに波形の平皿をつくれないだろうか？」。そんな博多曲物に対するこれまでにないアプローチが、境さんの挑戦のスタートとなった。

プレゼンテーションも貴重な経験となった

樹脂含浸で形と耐性を維持する

使うのは、厚さわずか3ミリのスギの無垢（むく）材。加工の難しい薄い板を、福岡県志免町所在の博多曲物・玉樹の職人が波形に成形する。美しいスギの木目を生かすために、装飾は一切排除。波の曲線は、皿を持つときに手を掛ける部分となる。

木には、元に戻る性質があるため、福岡県大川市所在の島崎興産が有する樹脂含浸の技術を用いた。樹脂で形状を固めることで、温度や湿度といった環境の変化で波形が損なわれる心配がない。

商談を行ったバイヤーからは「寿司を盛るのにいい」との声も

完成プロダクト「隼波―hayanami―」

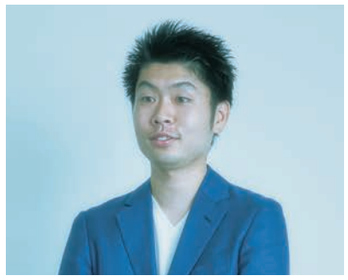
境さんは、製品名に「波」を入れることに当初からこだわった。サポートメンバーの下川氏は、「『波』を入れるのは賛成だが、製品をイメージしやすい名前であることを意識して」とアドバイス。幾つかのネーミング案を検討したが、最終的に平皿を低くしたことに由来して、低く飛ぶ鳥の名を組み合わせ「隼波―hayanami―」と命名。ロゴマークは、連綿と打ち寄せる波をデザイン化した。

「隼波」は、サラダや刺し身などを盛る食器や菓子受け皿、小物を置く皿としての使用を想定している。

一番の困難は新旧技術の融合

境さんは、プロダクトをデザインする際、用・形（ぎょう）・空（くう）の三つを大切にしている。

「用」とは、誰にでも使いやすいこと。「形」は形状が美しいこと。そして「空」はそのプロダクトがいかに空間と調和するか。今回制作した「隼波」は、使いやすく美しい形で、相手をもてなす気持ちや洗練されたやビジョンを共有するのが、想像以上に困難だったようだ。コミュニケーション力の向上は、今後人生を賭けてクリアしていきたい課題の一つになったと境さんは振り返る。


境 悠作
福岡県／プロダクトデザイナー

1988年生まれ。父親が福岡県出身で、父親の帰省時に福岡県の文化に触れて魅せられる。2007年明治学院東村山高校を卒業し、Wartburg College 経営学部入学。2009年 Northeastern University 経済専攻経営副専攻転籍。2014年にバンタンデザイン研究所プロダクトデザイン科卒業。船舶設計会社に就職するも、2016年に離職してフリーランスとしてデザイン業務に携わる。

同じ志を持った若き匠たち

これまでさまざまな伝統工芸に触れてきた境さんは、伝統工芸とは革新の連続で成り立つものだという考えを持っている。

「隼波」はまさに伝統的でありながら革新的。伝統のあるがままにとらわれない、境さんならではのプロダクトだといえる。

福岡の伝統工芸「博多曲物」

福岡の伝統文化に触れられる「博多町家」ふるさと館

伝統工芸に敬意を払う一方で、警鐘も鳴らす。「私たちは、日本の技術が海外で評価されていることに、満足してしまっていないだろうか」「日本らしい価値観を取り戻し、日本自らの評価基準で伝統工芸の素晴らしさを認めるべきではないか」と境さんは熱く語る。

今回、全国の若き匠たちと出会えて、伝統工芸の未来が明るく希望に満ちていると確信できたという。

伝統工芸について語られるとき、「復活に向けて」や「良さを見直すために」など、まるでかわいそうなものとしてのニュアンスが含まれることが少なくない。しかし、その厳しい現実に悲観することなく、新しい試みに挑戦する匠が大勢いることに境さんは驚いた。話してみると、モノづくりに対する志は皆同じだった。

境さんが次に取り組むのは、白磁のしょうゆ皿や、テーブのディスペンサーなど。いずれも日本らしさがユニークに光るデザインを考えている。最近オフィスも構えた。今後ますます活躍が期待されている。

「革新の連続が伝統工芸」と境さん

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT